

解説

土からみたグスク時代

4. 護佐丸の転封

外間 数男

Kazuo HOKAMA: Gusuku period of Okinawa that experimented from the soil.

4. Transfer of strategic foothold of Gusamaru.

はじめに

護佐丸は琉球史上最も知名度が高く、知勇、武勇の誉れ高い丈夫であり、琉球の楠木公とも称される。護佐丸は読谷山按司であり、また中城按司でもあった。沖縄最初の正史「中山世鑑」(1645年)は、1416年の尚巴志の北山(今帰仁グスク)攻めに浦添按司、越来按司とともに読谷山按司が参加したと記す。しかし同正史に護佐丸の名はない。読谷山按司を護佐丸と記す最初の書は「毛氏家譜」である。同書は護佐丸氏直系子孫の家譜であり、1690年ごろ8世豊見城親方盛定が作成したといわれる。その後護佐丸は、蔡鐸の「中山世譜」(1701年)や「球陽」(1745年)など首里王府の公式記録に登場する。その内容は「毛氏家譜」を踏襲したものとされ

る(中城村史, 1994)。また護佐丸は組踊「二童敵討」の題材として忠臣護佐丸で描かれ、座喜味グスク(写真1)や中城グスク(写真2)を築いた築城家としても知られている。

「毛氏家譜」によると、護佐丸は童名が真牛、父は山田按司、母は伝えなしと記される。山田按司の墓は山田村(恩納村)、護佐丸のそれは台グスク下(中城村)にある。護佐丸が読谷山按司に封じられていたころ、同地が王城(首里)から遠いことで中城へ移封される。居城を中城に移して中城按司となる。尚泰久王代に勝連按司・阿麻和利の謀反に備えて兵馬を整えていたところ、阿麻和利の計略に乗せられた王は護佐丸討伐を命じた。護佐丸は王に歯向かうことなく自刃したとされる(北中城村史編纂委員会、



写真1. 座喜味グスク。



写真2. 中城グスク。

2012；中城村史編纂委員会，1994）。

名築城家とされる護佐丸は二度居城を移している。最初の居城・山田グスク（写真3）は護佐丸の生誕の地であり、北山攻めに参加したころの居城とされる。1422年ごろに山田グスクから座喜味グスクに移り、1440年ごろ座喜味グスクから中城グスクへ移動する。山田グスクから座喜味グスクへの移動は、北山滅亡により砦としての役目を終え、海外交易港として読谷山の長浜港に目をつけたからといわれる。また座喜味グスクから中城グスクへの移動は、台頭する阿麻和利に対する守りを固め、東海岸での交易拡大を目論むものであったという（北中城村史編纂委員会，2012；中城村史編纂委員会，1994）。



写真3. 山田グスクのあった石灰岩丘陵地。
崖下に国頭西海道の古道が現存。

この移動にともない、居城の規模は拡大し、生産基盤である土も変わっていった。山田グスクは恩納村山田の石灰岩台地上にあるが、周囲は赤黄色土の国頭マージが広く分布する地域である。また座喜味グスクは読谷村座喜味の国頭マージ丘陵上にあるが、グスクの西および南側には広大な暗赤色土壌（島尻マージ、写真4）が分布する。中城グスクは中城村の石灰岩台地上にあるが、周囲はジャーガル地帯である。



写真4. 島尻マージ畑。
石で囲った畑に小石が散在。

護佐丸は国頭マージ地帯から島尻マージ、そしてジャーガル地帯へと拠点を移動している。その移動は、瘠薄土壌から肥沃土壌へ、生産不安定から安定へと、より良い条件を求めて行われたように見える。それが意図的に行われていたなら、土や農業についてかなり熟知していたことになる。そこで土の視点から移動の背景を探ってみた。

1. 15世紀の沖縄

護佐丸が武将として名を馳せるのは15世紀初めから中期のころである。この時代は混乱と安定が錯綜する時代であった。1406年に中山王（浦添グスク）武寧、1416年に北山王（今歸仁グスク）攀安知、1429年に南山王（南山グスク）他魯毎が滅亡し、沖縄は統一される。王都は浦添から首里へと移り、海外交易拠点として那覇港が整備され、中国、朝鮮、東南アジアとの中継貿易や室町幕府との通交が活発になったころである。

三山統一後は王国の安定化が図られたが、1439年に尚巴志が死去すると、王位が数年で変わるなど政情不安定が続いた。1453年には第一尚氏6代目の王位継承で志魯・布里の乱が起こり、首里グスクは焼失する。また1458年

には有力按司であった護佐丸と阿麻和利の覇権争いが起こり、首里グスクが再度延焼する。その後第一尚氏政権は安定化に向かっていたが、1470年に側役人の金丸によって政権は乗っ取られてしまう。7代・64年間続いた第一尚氏王統は消滅し、金丸（尚円）を祖とする第二尚氏王統が1879年（明治12年）の廃藩置県までの400年余りを統治することになった。

第一尚氏政権は当初から安定したものではなかったといわれる。第一尚氏は諸豪族の連合政権であり、三山統一後も有力按司が割居するなど諸按司を完全に掌握するほど力を得ていなかった。また王城内外の整備や寺社の建立、内乱の勃発、喜界島遠征などで財政窮迫に陥ったことも王権を短命で終わらす要因になったという（新里，1975）。

2. 読谷山と中城の自然環境および土壌

1) 読谷山の自然環境と土壌

護佐丸の父山田按司の居城、山田グスクは恩

納村山田にある。恩納村はかつて恩納間切と称し、1673年に金武間切から4村、読谷山間切から8村を割いてできたと「球陽」に記されている。読谷村もかつては読谷山間切であった。恩納間切が新設される前の読谷山間切は、南の比謝川から北の谷茶までを含めた地域である。護佐丸時代の読谷山は、現在の読谷村全域と恩納村谷茶から南側を含めた地域であったと想定される。

現在の読谷村は面積34.47㎩である。そのほとんどは台地段丘が占め(72.6%)、低地(1.2%)、山地(0.5%)は少ない。台地段丘は石灰岩に由来する海岸段丘である。また丘陵地が25.7%を占める(表1)。読谷村の大部分を占める台地段丘には河川がない。嘉手納町との境を流れる比謝川とその支流長田川、恩納村境にある長浜川があるだけである。台地段丘では、雨が地表面を流れることなく地下に浸透し、地下水として海に注がれる。また湖沼などもない。典型的なドライランドである。

表1. 各地域の地形別の面積¹⁾。

(㎩)

地域	面積	山地(%)	丘陵地(%)	台地段丘(%)	低地(%)
恩納村	50.87	6.57(12.9)	28.89(56.8)	9.44(18.6)	5.97(11.7)
読谷村	34.47	0.18(0.5)	8.86(25.7)	25.02(72.6)	0.41(1.2)
北中城村	11.11	—	7.34(66.1)	2.57(23.1)	1.20(10.8)
中城村	15.27	—	9.58(62.8)	0.40(2.6)	5.29(34.6)

¹⁾ 国土庁土地局(1977)土地分類図(沖縄県)から作成。

これに対し恩納村は、面積(50.87㎩)の56.8%は丘陵地が占める。山地(12.9%)と合わせると70%近くが山地、丘陵地となる。また台地段丘は18.5%、低地が11.7%を占めている(表1)。また島の脊梁をなす山地からは多くの小河川が谷を下って海に流れ込み、海岸低地など扇状地を形成している。恩納村は低地が

少なく、山地、丘陵地の卓越する高島である。しかし恩納村が高島のであっても、その大部分は標高100m以下であり、200m以上の山地は2.1%にすぎない。谷茶から恩納村南端の与久田の地域もほぼ同じ地質、地形である。読谷村と恩納村は相反する地形をなしている。

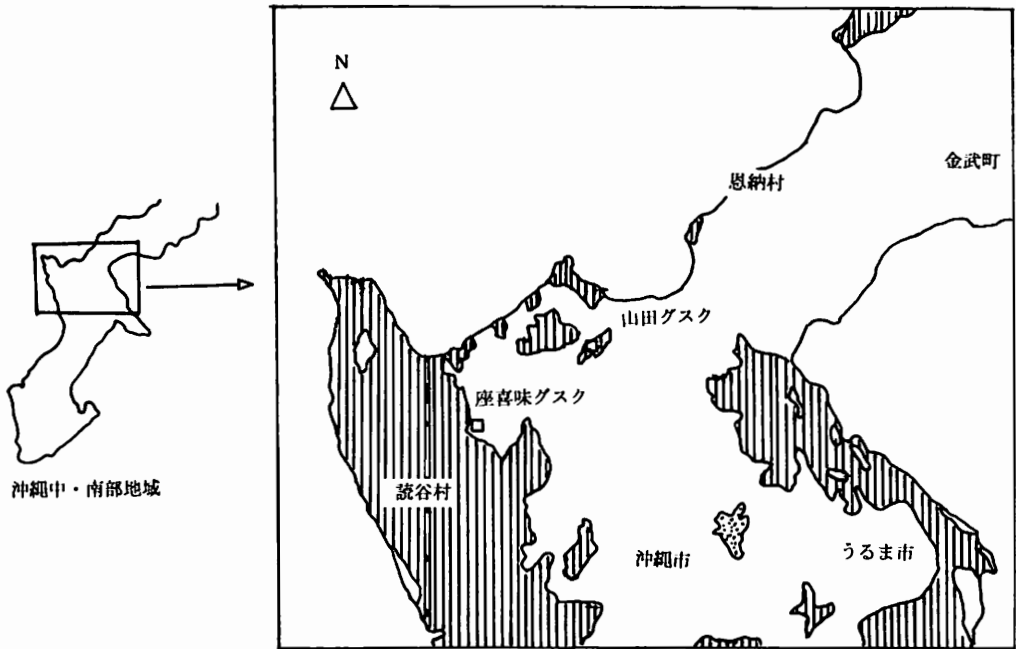


図1. 沖縄本島中南部北地域の土壌図。

暗赤色土
 国頭マージ(赤黄色土、岩屑土など)
 褐色低地土

国土庁(1977)土地分類図(沖縄県)から作成

読谷村に分布する土壌は(図1), 石灰岩由来の暗赤色土壌(島尻マージ)が最も多く、全体の67.3%を占める。そのほとんどは土層が浅く、地表下50 cm以内に岩盤が出現する。次いで赤色土壌の15.6%, 黄色土壌が5.6%となる。この2種土壌は国頭マージに含まれる。いずれも農耕地としての利用は少なく、ほとんどが山林、原野となり、一部が米軍施設用地となっている。また灰色低地土が1.8%, グライ土が5.7%, 石灰岩の露呈する岩石地が3.9%を占める(表2)。岩石地は海岸沿いに分布する。

恩納村の土壌は、全体の35.3%を黄色土壌が占め、赤色土壌の12.6%と併せると、48.4%は赤黄色土である。また古生層粘板岩や変成岩に由来する岩屑土が31.9%を占める。この土壌は赤色~黄色を呈する国頭マージであることが

ら、恩納村に分布する土壌の80%以上は国頭マージである。石灰岩に由来する暗赤色土壌(7.6%)は真栄田や山田、恩納など海岸沿いに分布し、灰色低地土(4.9%), グライ土(3.2%), 砂丘未熟土壌(2.4%)などが海岸や河川沿いの平地に分布する(表2)。

山田グスクは石灰岩丘陵の崖縁にあり、その周囲には暗赤色土壌が分布する(図1)。グスクの崖下にはかつて古読谷山(山田)の集落があった。しかし現在集落はなく、古井戸や古道(西海道)が残されている(写真5, 6)。また真栄田や久良波などにも暗赤色土壌が小規模に散在するが、この地域の代表的な土壌は赤黄色土である。この土壌は山田グスクの東、南側および北の仲泊、富着、谷茶などにも広範囲に分布している。山田グスクは石灰岩丘陵上にある

表2. 各地域の土壌の種類別面積¹⁾.(km²・%)

地域 km ²	岩屑性土 壤	未熟土 ²⁾	赤黄色土 壤 ³⁾	暗赤色土 壤 ⁴⁾	灰色低地 土	グライ土	岩石地・ (その他)
恩納村 50.87	16.22 (32.1)	1.23 (2.4)	24.35 (47.8)	3.84 (7.5)	2.54 (5.0)	1.65 (3.2)	1.04 (2.0)
読谷村 34.47	—	—	7.29 (21.1)	23.21 (67.3)	0.62 (1.8)	2.0 (5.8)	1.35 (3.9)
北中城村 11.11	—	4.48 (40.3)	1.45 (13.1)	3.52 (31.7)	1.21 (10.9)	0.45 (4.1)	—
中城村 15.27	—	7.59 (49.7)	—	—	7.68 (50.3)	—	—

¹⁾ 国土庁土地局(1977)土地分類図(沖縄県)から作成.²⁾ 恩納村は砂丘未熟土壌、北中城村と中城村は残積性未熟土壌.³⁾ 赤黄色土から暗赤色土壌を除いた面積.⁴⁾ 赤黄色土のなかの暗赤色土壌だけの面積.

写真5. 山田グスクの崖下にある古村の泉.



写真6. 山田グスク西側崖下にある古道.

が、周囲は赤黄色土の分布する国頭マージ地帯である。

一方座喜味グスクは赤黄色土の国頭マージ丘陵上に建つが、グスクの西および南側には広大な暗赤色土壌が分布する。現在その大部分は農耕地として利用され、農業生産の一大拠点となっている(写真7)。グスクのある丘陵から東および北側は赤黄色土が分布する国頭マージ地帯である。その大部分は森林地帯となっている。



写真7. 座喜味グスク南側に広がる農地。島尻マージの農耕地。

2) 中城の自然環境と土壌

17世紀中ごろ作成された「琉球国高究帳」には、中城間切が26ヶ村からなることが記されている。そのなかには現在の宜野湾市(2村)と沖縄市(1村)の一部、北中城村の全部が含まれる。その後宜野湾市の2村と沖縄市の1村、1946年に北中城村が分離して、現在のかたちとなった。

現在の中城村は地形的に丘陵地と低地に二分される。丘陵地は内陸台地を形成し、村面積(15.27 km²)の62.7%を占めている。また低地(34.6%)は海岸沿いに広がり、中城平野をかたちづくり農業地帯となっている(写真8)。その間に台地段丘(2.6%)がある(表1)。村内を流れる川は少なく、伊集から和宇慶を通過して海に注ぐ小川が唯一である。しかし丘陵東斜面に降った雨は、多くの溝を伝って海に流れ込み、海岸沿いには沼地や湿地帯が形成されていた。また地下水は豊富にあり、井戸も各地に掘られ、水に困ることはなかった。



写真8. 中城グスク東海岸沿いの平地。
中城平野。

北中城村は、村面積(11.11 km²)の66.1%を丘陵地が占めている。台地段丘の23.1%と合わせると90%近くは丘陵台地である。低地(10.8%)は海岸沿いに分布し、中城平野の北端を占めている(表1)。

中城村と北中城村を合わせた地形で見ると、丘陵地が全体の64.1%を占める。台地段丘が11.3%、低地が24.6%となる(表1)。両村を合わせた地形は丘陵地と低地に二分されるが、丘陵地が卓越している。

土壌の分布をみると(図2)、中城村は灰色低地土が50.3%を占め、残積性未熟土壌が49.7%となっている(表2)。この2種以外の土壌はない。いずれも泥灰岩に由来するジャーガルであることから、中城村は典型的なジャーガル地帯である。また北中城村は残積性未熟土壌が40.3%を占め、暗赤色土壌が31.7%、赤黄色土が13.1%、灰色低地土10.9%、グライ土4.1%となっている(表2)。北中城村は泥灰岩に由来するジャーガルが50%以上を占めるが、石灰岩に由来する暗赤色土壌や国頭マージの赤黄色土が分布する多様な土壌構成となっている。中城村と北中城村を合わせた土壌をみると、残積性未熟土壌が45.8%を占めて最も多く、次いで灰色低地土が33.7%である。全体の70%以上はジャーガルが占める。また暗赤色土壌は13.4%、黄色土壌が5.6%となっている。

3. 15世紀の読谷山および中城での農業

1) 読谷山の農業

護佐丸が統治した15世紀初めから中期にかけて読谷山でどんな農業が行われていたかは明らかでない。考古資料や朝鮮漂流民見聞記(李朝実録)、17世紀中ごろの「琉球国高究帳」などから当時行われた農業を推測するだけである。

15世紀までには鉄製品が広く普及し、農耕具も一部鉄製となった。しかしヘラや鎌など小型農具に限られ、鉄製の大型農耕具(鍬や鋤など)は未発掘であることからなかったとされる。小型農耕具は島尻マージなどの軽しょう土壌で

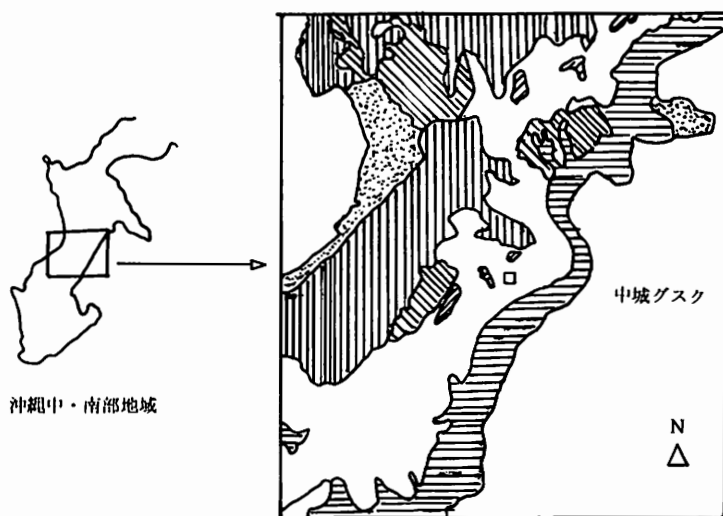


図2. 中城村と北中城村の土壌図.

残積性木熟土壌
 灰色低地土
 褐色低地土
 暗赤色土壌
 同頭マージ (赤黄色土など)
 他の土壌

国土庁 (1977) 土地分類図 (沖縄県) から作成

焼畑耕作するうえでは大きな支障がなかった。石礫や木の残根 (株) の多いなかでは大型農耕具より掘り棒など小型農耕具の方が威力を発揮したかもしれない。また小河川沿いの小規模田では、鉄斧などで加工した木製農耕具や鉄製 (一部) 農具が田の造成や耕起に用いられたと推測される。

これらの鉄製小型農具や木製農耕具を用いて読谷山では、島尻マージ地帯で畑作、特に焼畑耕作、谷底低地や河川沿いの沖積地で水稻耕作が行われていた。しかし生産の主体は畑作にあった。水田作は小河川や湧水地域などで小規模に行われていたが、生産性が低く、効率的に生産することも難しかった。また開田に必要な鉄製大型農具や工具、農業土木の知識・技術を欠くことなどから規模拡大はそれほど進まなかった。

朝鮮漂流民見聞記は、1477年2月に済州島を南向した船が風に流されて与那国島に漂着

し、1478年8月に帰国するまでに滞在した島々の様子を記している。この見聞記から15世紀中後期の農業や生活の様子を知ることができる。特に稲作地域と畑作地域で農業の形態に大きな違いがあることがわかる。稲作地域の与那国島や西表島祖納では米を専ら食し、粟は好まず、田は牛に踏ませて耕起し、刈り採った稲穂は稜庫に蓄えると記されている。また畑作地域の波照間島や新城島、黒島、多良間島では黍、粟、麦を栽培するが、稲はない。秋の麦の播種時には畑に牛糞を入れ、鋤で土を被せ、2、3月ごろ刈り入れる。そのあと直ぐに畑を耕して種を播く。粟もほぼ同じづくり方である。これらの島々では、米を島外 (祖納) に買いつけに行く」と記される (比嘉, 1959; 中山, 1978)。田のない畑作の島々は、米に対して強い愛着をもっていることがわかる。またこれらの地域では、稲や粟などを秋に播種し、冬から春にかけて生育させ、また牛糞などを施用し、年2作するな

ど、15世紀中ごろにはすでに集約的な冬作システムの農業が確立されていた。

朝鮮漂流民は与那国島と西表島祖納にそれぞれ約5ヶ月、波照間島などに各1ヶ月ほど滞在して宮古島経由で那覇に送られる。那覇には3ヶ月ほど滞在し、8月初めには帰国の途に就く。朝鮮漂流民見聞記にある畑作の島々は隆起サンゴ礁に由来する島々であり、島尻マージの分布する島である。この土壌は保水力が弱く排水が良いことから干ばつ被害を受けやすい。雨は地表面を流れることなく地下に浸透し、海に流される。宮古島や伊良部島などやや大きなサンゴ礁の島には稲作もあったが、湧水地など一部に限られていたと想定される。畑作の島々では田が造れないことから、米を他島(村)に求めざるを得なかった。

読谷山は島尻マージの分布する典型的な畑作地域である。朝鮮漂流民見聞記にある畑作の島々と同じ農業が読谷山でも行われていたと推測できる。すなわち麦、粟、黍を秋から冬、春にかけてつくる冬作システムであり、年2作、牛糞などを畑に施し、ヘラなど小型農耕具を用いて畑を起こし、ナスやウリ類、ショウガ、ニンニクなどの野菜類を栽培していた。おそらく

畑地は全面耕起することなく部分耕起とし、数年で移動を繰り返す焼畑農耕であったであろう。稲は小河川沿いや湧水地で小規模につくられていたが、用量を満たすことができなかった。必要であれば他島(村)へ買いつけに行ったかもしれない。この状態は護佐丸時代から近世までほとんど変わりのない。

「琉球国高究帳」にある読谷山間切は17ヶ村からなる。この村数には、1623年の恩納間切新設で分離した4ヶ村も含まれている。高究帳によると読谷山間切の石高は4,963石である。中頭地域では浦添間切の5,335石に次いで石高の高い間切である。この石高のほとんどは畑作に由来するものであり、総石高の81.4%は畠高となっている。これに対し石高の最も多い浦添間切は畠高が49.4%と田高とほぼ同じである(表3)。畠高が総高の80%以上を占める間切は、読谷山以外に沖縄島にはない。このことから読谷山間切は畑作に依存した地域であり、畑作が極端に卓越した地域といえる。畑作に偏重していることは、250年余り後の1873年でも変わらない。「琉球藩雑記」は読谷山間切の耕作面積650.8町・4,607.9石のうち、畑が616.8町(94.8%)、石高は4,240.4石(92%)と記して

表3. 中頭地域の各間切別田畑の石高¹⁾。

間切(村数)	合高・石	田高・石(%)	畠高・石(%)
西原(12)	2,886	2,115(73.3)	772(26.7)
浦添(15)	5,335	2,700(50.6)	2,635(49.4)
中城(26)	3,106	2,159(69.5)	947(30.5)
北谷(9)	3,435	1,812(52.8)	1,623(47.2)
越来(14)	4,381	2,479(56.6)	1,902(43.4)
具志川(9)	4,073	1,548(38.0)	2,525(62.0)
勝連(12)	2,022	915(45.3)	1,107(54.7)
読谷山(17)	4,963	626(12.6)	4,337(87.4)

¹⁾「琉球国高究帳」(沖縄県史料前近代1. 首里王府仕置)から作成。

いる。水田面積は34.1町(5.2%)、石高は367.5石(8.0%)であり、総石高の1割にも満たない(沖縄県史14, 1965)。

読谷山間切の村別石高をみると(表4)、そへ村が最も高く755石、次いでとけす・おさ村の722石、ふるけむ村の684石、たかしふ村

452石などとなっている。この中でそへ村やふるけむ村には田がまったくなく、とけす・おさ村、たかしふ村も田の石高割合は5%以下である。石高の高い村はすべて畑作村であることから、読谷山の多くの村は畑作に強く依存していたことがわかる。

表4. 読谷山間切の村別石高¹⁾。

村	合高・石	田高・石(%)	畠高・石(%)
湾	173.6	48.5(27.9)	125.1(72.1)
ふるけむ			684.4
戸口			228.7
そへ			755.1
城	256.4	21.6(8.4)	234.8(91.6)
上地	135.5	17.8(13.0)	117.9(87.0)
はびら	375.9	13.4(3.6)	362.5(96.4)
たかしふ	452.6	22.8(5.0)	429.8(95.0)
とけす・あさ	722.9	27.8(3.8)	695.1(96.2)
せなは			184.1
ゑらきな	219.4	50.2(22.9)	169.2(77.1)
喜那	347.7	118.4(34.1)	229.3(65.9)
長はま	56.0	17.4(31.1)	38.6(68.9)
よくた	52.0	38.2(73.5)	13.8(26.5)
前田	101.9	72.7(71.3)	29.2(28.7)
古読谷	79.8	63.0(78.9)	6.8(21.1)
ふつき	136.2	114.4(84.0)	21.8(16.0)
合計	4,963.2	626.3(12.6)	4,336.9(87.4)

¹⁾「琉球国高究帳」(沖縄県史料前近代1. 首里王府仕置)から作成。

田の石高は喜那村が118石と最も多く、次いでふつき村の114石となり、前田村72石、古読谷村63石と続く。これらの村は総石高で田高の占める割合が高く、ふつき村では84.1%を田高が占め、古読谷村、よくた村、前田村なども70%を越している(表4)。この田高率の高い、水田の卓越する村は国頭マージの分布する地域にある。喜那村もかつては国頭マージ地帯を流れる長田川沿いにあった(読谷村史, 1995)。

水田が卓越する村は、読谷山間切のなかでは総石高の低い村である。総石高の高いふつき村でも136石であり、石高の少ないよくた村は52石、古読谷山村が80石となっている(表4)。水田卓越地の村は河川沿いや海浜沖積地で小規模に稲作をしていたが、鉄製農耕具がなく、規模拡大に限りがあることなどから生産拡大が難しかった。また国頭マージは酸性の瘠薄土壌であることから養分が欠乏し、平地の少ないこと

は畑作が安定せず進展することもなかったと思われる。

読谷山間切は畑作に依存した地域であり、生産の拠点は島尻マージが広く分布する地域にある。島尻マージは膨軟で耕起が容易であるが、保水力が弱く、降雨後は水が圃場に留まることがない。雨水は地下浸透し地下水として海に放出される。そのため同地は干ばつ被害を受けやすい地域である。また開畑後は地力の消耗が激しく、適切な施肥管理を行わないと収量低下は避けられない。焼畑をすれば一時的に生産力は高まるが、地力の消耗が激しく数年単位で畑地を転換しなければならない。また畑作地域は、西に緩傾斜する台地にあることから冬の季節風や台風による潮害・塩害を受けやすい。

慶佐丸統治時代の読谷山は農業生産するうえで多くの問題を抱えていた。それを解決するためにアグロフォレストリー的な農業が行われていたと考えられる。すなわち畑は木々を残した部分耕作とし、倒木や残株を撤去せず、堀棒など小型農耕具で播種、除草など管理作業を行い、播種期をずらせて一斉収穫とせずに適宜穂刈りをすれば不利な条件も克服できる。しかし人力の及ぶ範囲では規模拡大が難しく、常に生産拡大と生産不安定がつきまとっていたと推測される。

2) 中城の農業

15世紀中ごろ中城間切でどんな農業が行われていたかは不明である。考古資料や朝鮮漂流民見聞記、「琉球国高究帳」などから推測するだけである。しかし同地がジャーガル地帯にあることから、島尻マージ地域にある読谷山とは異なる農業形態であったと想定される。

朝鮮漂流民の見聞記によると、沖縄島は田畑が半々か、または畑がやや多く、稲は冬に播種

し5月には熟する。収穫後直ぐに田を牛に踏ませて種を播き、7月に田植えし、秋から冬にかけて収穫する。また粟も冬に播種し、5月頃収穫する。更に6月に播種し、8月には熟するなど、稲、粟が年2作であったと記されている。また日々米を食し、飯を漆器碗に盛り、野菜や肉を入れた羹を塩、醤油でこさえて小磁器に入れ箸で食べる。日々3度の食事があった。牛、馬、鶏肉を食べ、市場にも出す。野菜はナス、ウリ、ニラ、ネギ、ショウガなどがあった。また清酒、濁酒をつくり、南蛮酒を飲むなど今と変わらない生活の様子を記している(比嘉, 1959; 中山, 1978)。

漂流民は沖縄島に3ヶ月ほど滞在し、8月初めには帰国する。滞在は那覇にある公館(泊)が当てられ、日々贅を尽くしてもてなされた。公館には役人が常駐するが、外出は許されたようである。外出時には寺判や商館、市場などを訪ね、農業の様子も伝えている。おそらく泊村、あめく村、真和志間切辺りを見ているのであろう。同地には島尻マージやジャーガルが分布し、「琉球国高究帳」には泊が畑高だけで34.5石、あめく村は総石高376.7石のなかで田高が60.2%を占め、真和志間切は総石高2,368石中69%が田高であることなどから、田と畑が半々にあるとの記述もうなずけるものである。また沖縄島滞在が5月から7月の稲、粟の収穫期に当たり、収穫、踏耕、再播種など水稻2期作を目の当たりにしたかもしれない。漂流民は読み書きができ、暦を知っていることなどから知識、記憶のレベルは高く、しっかりとした観察力をもって報告したのではと推測されている(小林, 1996)。

この見聞記からジャーガル地帯の農業をある程度知ることができる。当時田と畑が半々か、またはやや畑が多く、田は牛に踏ませて踏耕し、

畑は小鋸で耕すことなど耕起の様子を知ることができる。おそらく水田は谷底平地および小河川沿いのジャーガル地につくられ、畑は隣接する島尻マージの丘陵地にあったと推測できる。田は木製または一部鉄製の農耕具で畦や灌漑排水路をつくり、田は牛に踏ませて踏耕し、木製など大型農耕具や畜力を用いて整地し、ユウナやクロヨナなどの葉が緑肥としてすき込まれた。稲は秋冬に播種し、正月から田植え、5月には収穫していた。収穫は鉄製小型鎌を用いて穂刈し、楼庫におさめる。収穫後田は再び牛に踏ませ、7月には田植えし、秋から冬に収穫する二期作が行われていた。この二期作は沖縄だけに記され、与那国島、祖納にはない。その理由として二期作が当時の八重山諸島には伝わっていなかったとされる（安里、1996）。

しかし稲の二期作は大きなリスクを伴うものである。7月から9月は台風襲来期であり、雨は台風襲来時に集中豪雨になりやすく、秋はウンカなど害虫の大発生で壊滅的な被害を受けることもある。また水稻の年2回作は地力回復を待たずの栽培になることから、地力低下をまねき、緑肥の増施など適切な施肥管理をしないと減収する。肥沃で養分の天然供給量の多いジャーガルでも稲の連続栽培は収量低下が避けられない。しかし早生品種を用い、耐台風や耐塩害、耐虫性の品種を栽培することで二期作は可能と思われるが、収量を安定的に得ることは難しい。

「琉球国高究帳」にある中城間切の石高は3,106石である。中頭地域では石高の少ない間切であるが、田で見る限りでは浦添、越来間切に次いで多い。総石高に占める田高の割合をみると、西原間切が73%と最も高く、次いで中城間切の69.5%、越来間切50.6%となる（表3）。総石高のなかで田高の占める割合が高い間切

は、いずれもジャーガル地帯にある。ジャーガル地帯の間切は島尻マージ地帯に比べて田高率が高い。

中城間切の村別石高は表5に示すように、津波村が355石と最も高く、次いで安谷屋村の239石、わうけ村203石、ぜけらん村192石、島袋村180石となっている。石高の高い津波村とわうけ村は低地にあるが、安谷屋村とぜけらん村、島袋村は丘陵地にある。

また田高の高い村は、津波村の296石、わうけ村169石、安谷屋村157石、島袋村146石、いじょ村105石となる。田高の高い村は低地に多いが、安谷屋村や島袋村は丘陵地にある。安谷屋と島袋村は丘陵地にあるが、広い谷底低地をもつことによるものである。また畠高の高い村はぜけらん村の100石、寺ふてんま村の77石、前普天間村の67石であるが、いずれも丘陵地にあり、島尻マージの分布する地域である。

中城間切は総石高の69.5%を田高で占めることから水田の卓越した間切といえる。総石高に占める田高の割合を村別にみると、いじょ村が84.9%と最も高く、次いで津波村の83.4%、わうけ村83.1%、島袋村81.2%、安里村80.4%、奥間村80.4%、渡口79.8%、おぎとう村75.7%となる（表5）。田高割合の高い村は低地に多いが、島袋村やおぎとう村、ちよみじょん村などは丘陵地にある。丘陵地にある田高割合の高い村は、田が小河川沿いや広い谷底平野などにあり、水利に恵まれていたことによるものである。

中城は水量豊富で肥沃なジャーガル地帯にあることから農業するうえで最良の地である。しかしジャーガルは重粘質で粘質性が強く、排水不良であることから島尻マージ地帯の農耕技術をジャーガルに即適応することは難しい。おそらく中城では次の様に農業が展開したと思われる

表5. 中城間切の村別石高¹⁾.

村	合高・石	田高・石(%)	畠高・石 (%)
いちよう	124.7	105.9(84.9)	18.8(15.1)
わうけ	203.6	169.3(83.2)	34.3(16.8)
津波	355.2	296.3(83.4)	58.9(16.6)
奥間	120.0	96.5(80.4)	23.5(19.6)
安里	134.1	107.8(80.4)	26.3(19.6)
当間	94.7	70.6(74.6)	24.1(25.4)
新垣	102.1	72.9(71.4)	29.2(28.6)
玉城	116.4	85.6(73.5)	30.8(26.5)
八木	105.8	59.6(56.3)	46.2(43.7)
泊	59.3	41.1(69.3)	18.2(30.7)
照屋	43.0	23.8(54.2)	20.1(45.8)
添石	57.9	43.4(75.0)	14.5(25.0)
中城	57.0	38.2(67.0)	18.8(33.0)
大城	93.2	56.7(60.8)	36.5(39.2)
おぎたう	73.2	55.4(75.7)	17.8(24.3)
安谷屋	239.5	157.5(65.8)	82.0(34.2)
前普天間	106.4	39.3(36.9)	67.1(63.1)
寺ふてま	120.6	42.8(35.5)	77.8(64.5)
ぜけらん	192.1	91.8(47.8)	100.3(52.2)
喜舎場	100.7	63.1(62.7)	37.6(37.3)
ちょみじょん	129.9	91.3(70.3)	38.6(29.7)
くば	47.1	28.6(60.7)	18.5(39.3)
わにや	130.0	86.3(66.4)	43.7(33.6)
戸口, 宮城	89.7	71.5(79.7)	18.2(20.3)
島袋	180.4	146.4(81.2)	34.0(18.8)
諸見里	27.5	16.4(59.6)	11.1(40.4)

¹⁾「琉球国高究帳」(沖縄県史料前近代Ⅰ. 首里王府仕置) から作成.

る.当初丘陵地や傾斜地で焼畑耕作を中心とし、一部で水田稲作も行われていたが、面の拡大にとともない低地に降りていった。低地での水田農耕は小規模で技術的に未熟であったことから、その展開は遅々として進まなかった。しかし鉄製農器具と土木技術の進展により、低地での水田農耕も拍車がかかるようになった。その担い手が読谷山の国頭マージ地帯にある水田農

耕民や奄美諸島からの動員にあったと推測される。護佐丸は座喜味グスクの築城に際し奄美諸島から人夫を徴用するなど強力な権力基盤をもっていたし、奄美諸島は当時として水田農耕の先進地でもあったことから(高宮, 2005)、同諸島や国頭の水田農耕民を動員することで低地の水田開発は推進できたと思われる。

4. 読谷山から中城への転封

護佐丸は尚巴志の北山攻めに読谷山按司として参加した。その時の居城は山田グスクであった。同グスクは護佐丸の先代が築いたものとされるが、父の代以前についてはまったくわからない。山田グスクは中山の北山監視目的で築かれたが、北山の滅亡後はその役目を終えて廃城となる。護佐丸は今帰仁グスクにとどまっている間に座喜味グスクの築城を指揮した。築城には山田グスクの石材が用いられたといわれる(名嘉, 1980, 1996; 當眞, 2012)。

座喜味グスクは山田グスクから南西約3kmにあり、石灰岩台地に隣接する国頭マージの丘陵地に築かれている。1422年に尚巴志が即位すると、北山監守として尚忠が派遣される。それと同時に護佐丸も座喜味グスクに移ったといわれる。その後1440に尚忠が即位すると、護佐丸は中城に移封される。座喜味グスクは中城移封後も廃城になることなく16世紀まで継続使用されていた(名嘉, 1980, 1996)。

護佐丸は山田グスク(約30×160m)から座喜味グスク(6,800 m²)、さらに中城グスク(13,400 m²)へと移動する。移動について明確な史料はないが、護佐丸は短期間で居城を替え、移動とともに居城規模を拡大していったことがわかる。また座喜味グスクから中城グスクへは20年を待たずしての移動であった。この移動は阿麻和利に対する防御、首里王府の西海岸での海外交易を有利にすること、奄美諸島での経済的主導権争いのためなどとされているが真意はわからない(名嘉, 1980, 1996)。それを土の視点から見ると次のことが想定できる。

護佐丸の最初の居城である山田グスクは恩納村山田の国頭マージ地帯にある。このグスクは山田一帯を支配する小領主の居城で、西海道での中山の北への盾の役割を担っていた(當眞,

2012)。グスクは石灰岩の丘陵縁にあるが、周囲には国頭マージが広がり、幾つかの小河川が流れて沖積地を形成していた。これらの沖積地では稲が作られ、台地では粟、麦作が行われていた。しかし平地は限られ、規模の拡大は難しい。そこで北山が滅亡し、その脅威がなくなったことで島尻マージが広く分布する座喜味に移動した。

しかし座喜味は面積が広大にあるが、水は少なく石礫は多い。水のないなかでは水田を開くこともできない。また西に緩傾斜する台地は冬の季節風をまともに受け、台風による潮害を受けやすい。開畑後数年は肥沃を維持することも可能であるが、その後は養分が溶脱し、生産力は徐々に低下していく。生産力を高めるためには養分の補給が必要になるが、当時として十分な堆肥づくりや施肥管理技術がなかった。また保水力の弱い土壌であることから干ばつの被害を受けやすく、しばしば飢饉に見舞われたと想像される。これらの条件下では規模の拡大や安定した農業経営ができない。そこで中城の地が選ばれる。

中城は中山王(浦添グスク)英祖を祖とする先中城按司が治めていたが、島尻の高嶺間切へ移動したことにともない護佐丸が移ってきた。中城は読谷山に比べて地味が豊かで、水の豊富な地である。また地形も変化に富み、丘陵台地が脊梁として南北にはしり、その東側には海岸線に沿って低地(中城平野)(写真8)が広がる。海岸平地は丘陵台地によって西風が遮られ、冬作に好適な条件となる。また近くに海をひかえることから、東海岸で海外交易を展開するうえでも都合がいい。

中城は地質、地理的条件および水の確保の点から恩納山田、読谷山に比べて圧倒的に有利である。読谷山では水のないことで水田耕作に限

界があったが、中城は水が豊富で土も肥えており、開田できる範囲も広大であった。しかしジャングル地帯にあることから、読谷山など島尻マージ地帯の技術や農具を中城に適合することは難しい。そこで護佐丸は、座喜味グスクの築城に奄美諸島から人夫を徴用したように、これらの島々から人夫を集め、海外交易で得た鉄製器具、農具をフルに活用して中城の開田・開畑を果たしたと思われる。奄美諸島は当時として水田稲作の先進地であり、開田にかかる技術を得ることも容易であった。また護佐丸は座喜味グスクの築城に際し今帰仁グスクの工法を取り入れ、それをさらに進化させて中城グスクを築いたといわれるなど進取の気概に富んでいた。さらに尚巴志の佐敷での農業土木や首里グスク内外の整備など大型土木工事についても聞き知っていたかもしれない。護佐丸の中城への移動は望むべくものであったと思われる。

おわりに

護佐丸の父・山田按司は中北山系（今帰仁グスク）の伊波按司を祖とする。伊波按司は先代今帰仁世の主が怕尼芝に滅ぼされたことで中頭の越来間切に落ちのびていた。そこで村人の後押しもあって伊波グスクを築き、北山の攻勢に備えていた。また山田グスクを築いた山田按司は伊波按司の子を養子とし二代目山田按司とした。その子が護佐丸である。護佐丸は、尚巴志の北山攻めに読谷山按司として参加し、父祖以来の仇を討ったといわれる（今帰仁村史編纂委員会、1975）。

護佐丸は北山（今帰仁グスク）の滅亡後数年で山田グスクから座喜味グスクに移った。座喜味グスクは護佐丸が北山に滞在する数年間で築かれたといわれる。その築城には山田グスクの石材が用いられ、奄美諸島から人夫を徴用して

短期に成し遂げられた。この移動について明確な史料はないが、北山の滅亡後山田グスクの役割がなくなり、海外貿易港として久良波より長浜港が優れ、読谷山の広大な平野に目をつけ、北山の残党の動きを監視するためであったといわれる（今帰仁村史、1975）。しかし十数年後には座喜味グスクから中城グスクへ移動する。その移動についても明確な史料はないが、座喜味が王城から遠いこと、台頭する阿麻和利に対する防御、東海海岸での交易拡大を狙って行われたなどとされるが、真意は伝わっていない（名嘉、1980、1996）。

沖縄最初の検地は慶長15年（1610年）に行われた。この検地では、各間切の等級を上、中、下、下々の4位、田畑の等級は5位に分けている。等級は地味の肥瘠、村落への遠近、貧富などを基準にしている。読谷山間切16村の等級をみると、田は中と下だけで、下が多く上田がない。また畑も上畑がなく、中と下だけで中がやや多い。読谷山間切の田畑は中位以下の評価であった。また恩納6村の田畑も中、下だけであり、評価は低い（読谷村史、1988）。これに対し中城は23村のほとんどが上田である。しかし畑はすべて下畑である。中城の田は最良であるが、畑は最悪と評価されていた（北中城村史編纂委員会、1996）。

また「琉球藩雜記」（1873年）から恩納、読谷山、中城3間切の単位面積（町）当り収量をみると（表6）、田の町当たり石高は中城が最も高く14.46石となっている。次いで恩納の11.55石、読谷山は10.80石と最も少ない。また畑は読谷山が最も高く6.94石となり、次いで中城の4.36石、恩納の4.07石となる。この結果は慶長検地の等級とほぼ同じであり、慶長検地から250年以上も経っても田畑の評価は変わらない。これを土壌の種類ごとにもみると、表

7のようになる。これは国土庁の土地分類図からそれぞれの土壌が50%以上にある上位4間切を選定し、田畑の単位面積(町)当たり石高の平均を表している。この表から田の石高はジャーガルの14.26石と最も高く、次いで島尻マージの11.87石となり、国頭マージは9.85石と最も少ない。また畑は島尻マージが6.94石と最も高く、次いでジャーガルの4.36石、国頭マージの4.07石となっている。この結果から田はジャーガルが最良であるが、畑は島尻マージが最良となる。国頭マージは、田畑のいずれもが生産性の最も低い土壌となる。この単位面積(町)当たりの収量は、「琉球藩雜記」に記されている総収量を面積で割った値であり、調査方法や単位などが不明であることから現在の反収と単純に比較することはできない。ただ当時における地域ごとの反収を比較検討するうえで貴重な史料である。

護佐丸の最初の居城、山田グスクは石灰岩丘陵上にあるが、周囲は国頭マージが広く分布する地域である。座喜味グスクは国頭マージの丘陵にあるが、西と南には広大な島尻マージが分布し、農業生産の一大拠点になっている。また

中城グスクはジャーガル地帯にあり、肥沃な平地が海岸沿に広がっている。護佐丸の拠点は国頭マージ地帯から島尻マージ、さらにジャーガル地帯へと変わっていった。その移動はより良い土壌、より良い条件を求めて行われたようである。

しかし土が変わると農業技術も変えざるをえない。土に合った農具も必要となる。15世紀までには鉄製品が広く使われ、農具も一部鉄製となった。しかし農具すべてを鉄製に変えることは難しく、ヘラや鎌など一部に限られ、大型鉄製農具にはまわらなかった。これらの一部鉄製小型農具は、島尻マージなどの軽しょう土壌で部分耕作や焼畑農耕をするには大きな支障がなかった。石礫や残根(株)の散在するなかでは刃先の狭い小型農具が使いやすい。大型農具は障害物の多いなかで威力を発揮することができない。また畜力を利用した犁耕も進展することはなかった。しかしジャーガル地帯に移ると農業は一変する。乾燥地土壌から湿地土壌へ、軽しょう土壌から重粘質土壌へ、排水良好土壌から排水不良土壌へと転換することになる。読谷山の島尻マージでは畑作が土壌に合っていた

表6. 恩納、読谷山、中城3間切の田畑の面積と石高¹⁾。

間切 (村数)	面積・町 合高・石	面積・町(%) 田高・石(%) 石/町	面積・町(%) 畑高・石(%) 石/町
恩納 (12)	107.1	66.8(62.4)	40.2(37.6)
	969.0	771.5(79.6)	197.5(20.4)
		11.55	4.91
読谷山 (16)	650.8	34.0(5.2)	616.8(95.8)
	4,607.9	367.5(7.9)	4,240.4(92.1)
		10.80	6.87
中城 (23)	341.9	134.9(39.5)	206.9(60.5)
	2,844.6	1,950.8(68.6)	893.7(31.4)
		14.46	4.32

¹⁾「琉球藩雜記」(沖縄県史14.資料編4)から作成。

表7. 土壌の種類と石高¹⁾.

土 壌 型	間 切 ²⁾	田高(石)/面積(町) 石/町	畑高(石)/面積(町) 石/町
国頭マージ	国 頭	502.8/49.6 10.13	180.2/46.9 3.84
	大宜見	369.0/45.7 8.07	39.4/11.4 3.46
	名 護	815.7/84.5 9.65	55.3/13.6 4.07
	恩 納	771.5/66.8 11.55	197.5/40.2 4.91
	平 均	9.85	4.07
島尻マージ	読谷山	367.5/34.0 10.80	4,240.4/616.8 6.87
	勝 連	393.7/31.8 12.38	771.4/151.5 5.09
	与那城	377.9/32.1 11.77	623.1/71.8 8.68
	具志頭	1,110.0/88.6 12.53	2,450.3/344.1 7.12
	平 均	11.87	6.94
ジャーガル	中 城	1,950.8/134.9 14.46	893.7/206.9 4.32
	西 原	2,152.2/152.2 14.14	510.0/118.9 4.29
	南風原	1,157.1/79.8 14.50	420.9/106.9 3.94
	佐 敷	1,021.3/73.2 13.95	336.8/68.6 4.91
	平 均	14.26	4.36

¹⁾「琉球藩雑記」(沖縄県史 14. 資料編 4) から作成.

²⁾国土庁(1977)土地分類図(沖縄県)から各土壌型が50%以上を占める上位4間切を選定.

が、中城のジャーガル地帯では水田作が合う。しかし畑作地帯の技術を湿地帯の農業に適応することは難しい。畑作から水田作に一挙に変わることも容易ではない。また米づくりは畑作に比べて高度な技術を必要とするものである。それを解決し活躍したのは恩納山田やふつきなど水田卓越村の民であり、稲の先進地であった奄

美諸島の水田農耕民であった。護佐丸は国頭地域や奄美諸島から賦役を徴用する権力基盤を持っていた。それを中城の開発に活かすことは容易なことであったと思われる。

護佐丸は1440年ごろ中城グスクに移ったとされる。しかしそれ以前に同地を拝領していたかもしれない。「球陽」は、護佐丸が読谷山城

に鎮居していたころ、王城が読谷山から遠いことで仲城を賜り、仲城按司に封じたと記す。中城が選ばれた理由は明らかでないが、台頭する阿麻和利に対する防御ともいわれる。しかし同地はジャーガル地帯にあり、土壌が肥沃で水も豊富にある。また中城グスク内には湧泉があり、座喜味グスクのように水を城外に求めることもない。中城に移ることで読谷山、座喜味グスクの問題を一挙に解決することができた。護佐丸は「賦性聡明にして英雄絶倫なり。誠実恭謹、色を正して朝に立ち、敢えて妄行せず、諸僚皆これを尊信する。誠に一朝の大臣為り」と「球陽」は記している。護佐丸は信頼された武将であり、知将としても名高い。中城に移ることは護佐丸にとって織り込み済みであったかもしれない。

護佐丸が中城グスクに居城を移したころ、同地では丘陵台地から海岸沿いの平地まで農地が広がっていたと想定される。丘陵台地では焼畑など畑耕作、海岸線に伸びる平地では稲作が行われていた。田は鉄製農具、工具の普及や水理の知識、技術の導入で水田造成に拍車がかかり、牛馬による踏耕や田の整地が行われていた。畑地は鉄製小型農具を用いて全面または部分耕起とし、粟、麦をつくり、田は稲を秋冬に播き、正月に田植え、6月に収穫する。また再度播種し、またはヒコバエの再生で秋から冬に収穫する二期作が行われていたのであろう。しかし二期作は台風災害のリスクが大きく、地力維持も難しいことからそれほど広がりはなかったかもしれない。同地では牛馬耕がいち早く普及し、農業生産の手段、または軍馬として重要な役割を果たしていたのであろう。1903年（明36）の統計によると、中城間切は馬の飼育頭数が1,336頭と沖縄島では最も多い。また読谷山間切の牛の飼育数2,475頭は沖縄島で最多である

（沖縄県史、1967）。この2間切は牛馬の飼育頭数が他の間切を大きく上まわっている。この飼育数は護佐丸時代のものではないが、飼育環境や伝統は引き継がれることから、当時としても牛馬の数は多かったと推測される。それは中国への貢物であり、家畜糞の採取、耕起や整地、軍馬に用いられたのであろう。

護佐丸が中城グスクに移った後も座喜味グスクは廃城にならなかった（名嘉、1980、1996）。また中城への移封が阿麻和利に対する備えであったといわれることから、読谷山は中城への移封後も護佐丸領地として残ったであろう。この読谷山と中城の地を得たことで護佐丸は強大な経済的基盤を確立することができた。17世紀中ごろの「琉球国高究帳」によれば、中城と読谷山間切を合わせた総石高は8,069石となる。田高2,785石、畑高5,284石は中頭地区では最大の石高である。総石高は中頭地区全体の26.7%を占め、田高は19.4%、畑高は33.2%を占める。また田は中城間切、畑は読谷山間切を主としていることから、干ばつなどの危険を分散することに大きく役立っている。干ばつにより読谷山が減収すると中城で補い、長雨など多雨で中城が減収しても読谷山が補うなど、相互に補完できる関係にある。沖縄で気象災害の最大なものは台風と干ばつである。しかし台風は冬作システムをとることで回避できるが、干ばつは難しい。干ばつは灌漑施設の整備で克服できるが、当時としては不可能であり神頼み以外ない。護佐丸は読谷山と中城の地を手に入れたことで、沖縄で最大の気象災害である台風と干ばつを乗り切ることができたと思われる。

護佐丸は好奇心旺盛な武将であり知将であった。生誕の地山田グスクを捨て、座喜味グスク、中城グスクへと居城を換えている。居城を移す

ことは大きな経済的負担をとまなうものである。また他按司との軋轢や摩擦などの脅威に曝すことでもあった。混乱と安定が錯綜する時代に居城を移動することは容易なことではない。しかし護佐丸はそれを成し遂げている。それは未知への好奇心であり、海外との交流、特に奄美諸島との交流のなかから生まれたものと思われる。

護佐丸の居城移動は、居城の規模および農業生産の規模を拡大するものであった。読谷山を畑作、中城を水田作の拠点にすることで気象災害に強い農業を確立し、経済的基盤を強大にすることができた。これによって盤石な経済基盤が構築され、首里王府や周辺諸按司を脅かす存在になったと推測される。しかし強大な首里王府や阿麻和利軍に対抗するほど力を得ることができず、1458年に滅ぶことになったと思われる。

謝辞

本稿をとりまとめるにあたり貴重なご助言と参考文献を貸していただいた大城喜信氏（元沖縄県農林水産部長）に感謝の意を表す。

引用文献

安里進 1996. 考古学からみた琉球史・上. ひるぎ社.
 比嘉春潮 1959. 沖縄の歴史. 沖縄タイムス社.
 北中城村史編纂委員会 1996. 北中城村史第2巻 民俗編. 北中城村役場.

北中城村史編纂委員会 2012. 北中城村史第7巻 文献資料編. 北中城村役場.

小林茂 1996. 15世紀後半の南西諸島南部の土地利用と景観. 丸山雍成編「前近代における南西諸島と九州-その関係史的研究-」. 多賀出版. pp.161 - 179.

球陽研究会編 1995. 球陽・読み下し編. 角川書店.

中城村史編集委員会 1994. 中城村史第1巻, 通史編. 中城村役場

今帰仁村史編纂委員会 1975. 今帰仁村史. 今帰仁村役場.

名嘉正八郎 1980. 沖縄県. 「日本城郭体系第1巻 北海道・沖縄」. 新人物往来社. pp. 235 - 345.

名嘉正八郎 1996. 図説沖縄の城. 那覇出版.

中山盛茂 1978. 琉球史辞典. 文教図書.

沖縄県沖縄史料編集所編 1981. 「琉球国高究帳」. 沖縄県史料前近代1. 沖縄県教育委員会. pp. 123 - 158.

沖縄県史 14. 資料編 14. 琉球政府, 1965.

沖縄県史 20. 資料編 10. 琉球政府, 1967.

新里恵二 1975. 沖縄史を考える. 勁草書房.

高宮広土 2005. 島の先史学. ボーダーインク (那覇市)

當眞嗣一 2012. 琉球グスク研究. 琉球書房.

読谷村誌編集委員会編 1988. 読谷村史第3巻 資料編 2. 文献にみる読谷山. 読谷村役場.

読谷村誌編集委員会編 1995. 読谷村史第4巻 資料編 3. 読谷の民俗上. 読谷村役場.